特集

現代社会における家族ならびに結婚の意味を問う

Part II 現代社会における結婚の意味を問う

女性にみる結婚の意味を問う

神 原文 子

要 約

本稿では、はじめに、「女性にみる結婚の意味を問う」うえでの検討課題を整理する。たとえば、結婚の意味を問う「女性」とは誰のことか？ 女性たちの多様な結婚観をどのように類型化するか？ 現代日本は、晩婚化・未婚化と言えるのか？ など。そのうえで、既存の官庁統計、インターネットからの情報、学生たちへのアンケートやシングル・マザーの友人たちからの聞き取りデータをふまえて、未婚女性にみる結婚の意味について考察する。明らかになった興味深い点をいくつか挙ると、以下のとおりである。①結婚情報におけるジェンダー格差が顕著であること。②女性の場合、独身生活の利点が男性よりも高く、理想の結婚相手へのこだわりが男性よりも高い分、独身生活から結婚生活へ乗り換えるという選択が男性以上に難しいこと。③現代女性の結婚イメージの中には、前近代的な結婚イメージ、近代的な結婚イメージ、ポスト近代的な結婚イメージが混在していること、など。

キーワード：女性、結婚の意味、ジェンダー格差

2004, 家族社会学研究, 15(2): 14-23

Considering the Meaning of Marriage as Observed in Women

Fumiko Kambara

Abstract

In my paper entitled "Considering the Meaning of Marriage as Observed in Women", I would first like to outline the issues to be considered, which include among others: exactly who are the women who question the meaning of marriage; how can their various concepts concerning marriage be categorized; and whether present-day Japan can be said to be following a late-marriage or single-life trend. Based on answers to these questions and also taking into consideration official statistics, information culled from the Internet, surveys of students and interviews with single parent female friends, I considered the meaning marriage has for single women. Some findings of interest are as follows: 1) There is a marked difference in gender regarding information on marriage; 2) Advantages of being single are higher in women than in men, with women having a higher standard as regards their marriage partner thus making it more difficult for them to make the transition from single to married life as compared with men; and 3) The concept of marriage among contemporary women is a mixture of pre-modern, modern, and post-modern concepts.

Key words: women, meaning of marriage, difference in gender

2004, Japanese Journal of Family Sociology, 15(2): 14-23

1. 「結婚」を論じるうえでのいくつかの疑問

第13回大会シンポジウムにおいて、「女性にみる結婚の意味を問う」の私の報告では、他の報告者の報告内容と重複することなく、しかも相互の関連づけを考慮するなら、現代日本の都市社会に焦点をあてた内容とするのが妥当だろうと考えた。しかし、報告準備をするなかで、「女性にみる結婚の意味を問う」うえでの疑問が次々と浮かんできた。はじめに、それらの疑問を「女性にみる結婚の意味を問う」検討課題として整理しておく。

まず第1に、「女性にみる結婚の意味を問う」べき“女性”とは、どのような女性のことかという疑問である。たとえば、国立社会保障・人口問題研究所は、1952年の第2回「出産力調査」以降、5年ごとに出生動向基本調査を実施し、1982年の第8回調査からは、夫婦調査に加えて独身者を対象に「結婚と出産に関する全国調査」を行っており、そこでは、結婚への意欲や希望の結婚像などについてかなり詳細なデータがとられている。しかし、夫婦調査では、結婚について、初婚年齢、出会いの年齢、交際期間、出会いのきっかけなどが質問されているが、結婚の意識については一般的な傾向が捉えられているだけである。他方、1997年の『国民生活選好度調査』を見ると、未婚・既婚あわせて結婚相手の条件を問うているものの、既婚者には、「結婚した時の条件」と断って問うており、しかも残念ながら、報告書では、未婚者と既婚者と区分した集計結果が示されていないのである。未婚者のみならず、既婚者も、また、離死別者も、人生の節目ごとに「結婚の意味」を問うことがあるだろうし、ライフステージが異なれば、結婚の意味づけが異なっても不思議ではないが、報告書からは、そのような違いは把握できない。少なくとも、これらの官庁統計をみる限り、「結婚の意味」を問うのは、人生のなかで「結婚」という課題に直面する未婚男女に限られたことで

あるかのような印象を受ける。しかも、結婚に関する意識調査がもっぱら独身者を対象に実施されている背景として、「結婚は人生のゴール」であり、「結婚は人生に1度のもの」といった結婚観が垣間見える。独身女性だけが「結婚の意味を問う」のにふさわしく、既婚女性や離死別女性にとっては“無意味”か、“手遅れ”と考えられているかのようであるが、果たしてそうなのだろうか？ なによりも、未婚・既婚を問わず、少なくとも、16歳以上のすべての女性を対象とする「結婚の意味」を問うデータが欲しい。

第2に、結婚の意味づけや結婚相手の条件については、「結婚と出産に関する全国調査」の独身者調査でも、時系列的にデータがとられているが、「結婚」の意味や質問項目および選択肢の意味自体を再考する必要があるのではないかという疑問である。現代人は、「結婚」を、法律婚のみと理解しているのか、あるいは、非法律婚も含めて理解しているのだろうか。また、1997年の調査報告書によると、結婚の利点については、男女とも「精神的な安らぎの場が得られる」が最も多く、男女で比率の差もみられないようであるが、「精神的な安らぎの場が得られる」ことの意味は、果たして男女で同じなのだろうか。同様に、結婚相手の条件として、第1位は、男女ともに「人柄」であり、第2位として、女性の「経済力」、男性の「容姿」を大きく引き離しているが、結婚相手の条件として、どのような「人柄」を希望するかという具体的内容では、かなり男女差があるのではないだろうか。さらに、男女の結婚観の違いについて、山田昌弘氏が指摘するように、「男性は、自分よりも学歴、職業ランク、就職先の企業規模、年齢が低い女性を求め、女性は、自分プラス自分の父親よりも、学歴、職業、企業規模が高く、自分よりも年齢が高い男性を求める傾向がある」ならば、男女それぞれの「身体化した性役割分業」意識の違いと、結婚の意義づけや結婚相手の条件の違いとの関連についても検討する必要があるようだ（山田、1996）。

第3に、上記の報告書によると、男女ともに、高学歴の者ほど相手の条件を重視、または、考慮する割合が高くなっており、結婚の意味づけや結婚相手の条件については、同性内での格差が想定されるが、女性の階層とさまざまな結婚観との関連はどうかという疑問である。たとえば、近年、増加傾向にある、10代で“できちゃった結婚”をする女性たちは、結婚をどのように意味づけ、結婚相手としてどのような条件を期待したのだろうか？恋愛、セックス、同棲、婚姻、出産、相手の条件など、結婚観の相違にみる女性類型を捉えることも重要な課題である。

第4に、“できちゃった結婚”の増加とも関連するが、「子どもを産むなら、結婚してから」という意識のみならず、「結婚したら束縛される」、「結婚したら相手に養ってもらう」という結婚イメージをもっている未婚女性が少なくないが、結婚イメージがこのように「旧態依然」としているのは、どうしてなのかという疑問である。あるとき、一人の女子学生が、「母親は、『結婚は人生の墓場や』と言うんです。そうなんですか？」と質問してきた。未婚女性の結婚イメージの形成に影響を及ぼしている諸要因を探るうえで、親世代が娘に伝える結婚情報について検討が必要である。のみならず、未婚女性をターゲットとしてマスメディアから流されている結婚情報について検討することも必要だろう。

ついでながら、「結婚の意味」を問ううえで、ジェンダー差に関係なく共通した素朴な疑問を呈したいと思う。

第5に、「結婚」という場合、「結婚する・結婚しない」、「結婚している・結婚していない」、「結婚経験あり・結婚経験なし」といった区分をすべて含むけれど、これらの区分のどこに焦点をあてるかによって、論点が異なってくるが、これらの区分を考慮しながら、「結婚」について議論する必要があるのではないかという疑問である。

第6に、近年、しきりに、少子高齢化と“晩婚化・未婚化”が関連づけられ、あたかも“晩婚

化・未婚化”が“社会問題”であるかのような論調が少なくないが、果たして、現代社会は、「晩婚化・未婚化」社会なのかという疑問である。厚生労働省の人口動態統計によると、1950年の平均初婚年齢は、男性25.9歳、女性23.0歳だったものが、2001年には男性29.0歳、女性27.2歳と、この50年間にそれぞれ結婚年齢が2.9歳、4.2歳上昇している。しかし、1950年から2001年までの約50年間に、男性の平均寿命は58.0歳から78.1歳へと約20年長くなり、女性では61.5歳から84.9歳へと23.4年長くなっており、単純に計算すると、結婚後の人生は、男性では17年、女性では19年長くなったことになる。平均寿命の伸びから初婚年齢の上昇をみると、到底、“晩婚化”とは言えない。また、未婚化についても、生涯未婚率が徐々に高くなっているとはいえ、少なくとも男性の8割、女性の9割は結婚している。しかも、一人ひとりの生涯における夫婦生活年数の平均値は、既婚率の高さ、離婚率がまださほど高いこと、そして、平均寿命の長さから推測して、おそらく、わが国は世界一長いのではないだろうか。“未婚化”という解釈についても再考が必要だ。

本稿では、既存の官庁統計、インターネットからの情報、身近にいる学生たちや“子連れシングル”の友人・知人たちからの聞き取りデータを踏まえて、未婚女性に限定して、可能な限り、結婚の意味について考察する。

2. 「結婚」情報におけるジェンダー格差

書店に行くと、『ゼクシー』のような結婚情報誌のみならず、恋愛や結婚をテーマにした一般書が数多く並んでいる。また、いわゆる結婚シーズンともなると週刊誌やファッション雑誌なども結婚特集を組み、結婚情報が氾濫する。しかし、これらの雑誌や書籍の大半が、未婚女性をターゲットにした内容になっており、男性向けの結婚情報誌や一般書を探すことは難しい。マスメディアなど

からの結婚情報のターゲットは、“若い”未婚女性であり、ジェンダー差のみならず、年代差も顕著である。しかも、それらの内容は、結婚式の“華やかさ”や“幸福”イメージのみを振りまいている。人生における結婚の重みが男女で違うかのような捉え方に対する疑問は、微塵も感じられないものが少なくない。

「結婚情報」を広義に捉えると、好むと好まざるとにかかわらず、男性よりも女性のほうが、マスメディアからの結婚情報のみならず、育ちのなかで、たとえば、結婚式、花嫁衣装、婚礼家具、改姓、退職、出産、“ハイミス”、シングル・マザーなど、同性の結婚情報に触れる機会が多いに違いない。これらが、結婚情報の可視性・話題性におけるジェンダー差となり、また、それゆえに、「女性にとっての結婚とは?」、「女である自分にとっての結婚とは?」など、「結婚」を考える機会のジェンダー差にもつながりやすい。しかも、ここで押さえておきたいことは、結婚における“華やかさ”のジェンダー差のみならず、結婚することによる不利益や拘束感のジェンダー差、さらに、「結婚のマイナス」に対する感度のジェンダー差も、ようやく顕在化してきたことである。

それでも、「女は結婚したがっているということになっている」（姫野，2000）という前提に基づくマスメディア情報が氾濫し、「男性にとって結婚はイベント、女性にとっては生まれ変わり」（山田，1996）といった“説得力のある”“わかりやすい”説明が、専門家の間でもなんとなく支持され、知らず知らずのうちに、「結婚の重みは男女で違う」という意味づけが確たるものとイメージされ、そして、マスメディアは、相も変わらず、“若い”未婚女性をターゲットに結婚情報を流し続ける。

実際には、マスメディアなどからの情報は、専ら「消費としての結婚」に関するもので、生き方の羅針盤となる情報は乏しく、加藤春恵子氏のいう「情報砂漠」（加藤，2001）が実態であっても、だからこそ、“役に立つ”“生き方の指針になる”

情報を求める女性は後を絶たず、結婚情報の提供者と結婚情報の消費者との供給と需要のサイクルがエンドレスに続くことになるのだろう。

ついでながら、ある1日に、インターネットで「結婚の意味」を検索すると、実に530件のサイトが列挙された。それらのサイトのなかで、「結婚の意味」について意見交換する掲示板の“カキコ”の大半が女性であった。「カキコによる結婚物語」は、それはそれで興味深いものがあるが、当事者にとっては、ピア・カウンセリング的な癒し効果もたらされているようであり、「結婚を語る」にも、ジェンダー差がうかがえるのである。

3. 女性を取り巻く結婚の意味づけを探る

(1) 官庁データにみる「女性における結婚の意味」

近年実施された、結婚をめぐる官庁統計や世論調査結果について概観する。

はじめに、「第11回出生動向基本調査—独身者調査，1997」をみてみよう。厚生労働省は、晩婚化・未婚化を少子化の重要な要因として捉えており、「なぜ、女性たちは子どもを産まないのか」という少子化の要因を、「子どもを産まないのは結婚しないからだ」と捉えており、そのため、本調査からも、未婚男女は「なぜ結婚しようとしなのか」という疑問を解きたいという意図が伝わってくる。たとえば、結婚する意思をもつ未婚者は90%を下回ることが強調されている点である。具体的には、男子85.9%、女子89.1%である。

もう少し詳しくみると、「ある程度の年齢までには結婚するつもり」の男子は48.6%、女子は42.9%と、男女ともに半数以下であり、逆に、「理想的な相手がみつかるまで結婚しなくてもかまわない」男子は50.1%、女子は56.1%と、こちらは男女とも過半数を超える。「結婚には利点ない」と考えている男子30.3%、女子25.5%と多くないものの、「独身生活は利点あり」との回答は、男子82.7%、女子88.5%ときわめて高いのである。そ

れでも、「男女が一緒に暮らすなら結婚すべきだ」という考えに賛成の男子は69%、女子は59.3%と高いのである。

女性たちの多くは、現在のシングル・ライフに利点ありと考えており、結婚生活に利点がないとは思わないが、理想の相手がみつかって、その相手と一緒に暮らしたいと思えるならば結婚したいということのようである。

上記のデータにおいて、「独身生活は利点あり」と考えている男女は圧倒的な多数であり、彼ら彼女たちの多くは、山田昌弘氏のいう“パラサイトシングル”ライフをエンジョイしているのだろう。ところで、「第2回家庭動向調査1998」によると、パラサイトシングルは、男性よりも女性に多く、とりわけ、母親に「身の回りの世話」をしてもらっている成人した男性は51.8%、成人した女性では73.1%と非常に高い数値になっている。また、「経済的支援」を受けている成人した男性は29.7%、成人した女性は39.8%である。

わが国において、パラサイトシングルの男女の比率が結構高く、彼ら彼女たちが、結婚したいと強く突き動かされることがなく、独身生活を送ることに何ら支障はないという事態に変化がない限り、“パラサイトシングルの時代”は、当然続きそうである。

女性についていえば、パラサイトシングルの比率が男性より高く、それだけ、独身生活の利点が男性よりも高く、結婚の理想の相手へのこだわりが男性よりも高い分、独身生活から結婚生活へ乗り換えるという選択を、男性以上に難しくしていると解釈できる。

さらに、わが国では、まだまだ、女性たちの結婚をめぐる多様な生き方を認めようとしめない風潮が強いことを、「第2回全国家庭動向調査1998」や「朝日新聞世論調査」(2003.6.27付)にみることができる。

すなわち、「結婚せずに、1人で生きていくことに共感しない」、「結婚せず、1人で子どもを産んで育てることに共感しない」、「結婚したら子ども

はもつべきだ」、「子どもが小さいうちは母親は育児に専念したほうがよい」、「結婚したら自分のことを犠牲にしても子どものことを優先すべきだ」といった考え方に対して、世代が高いほど圧倒的な多数の支持を得ているのである。未婚男女との意識のずれは顕著である。そして、未婚の男女にすれば、未婚でいるよりは、さほど風当たりは強くないが、一度結婚すると、周りから上記のような考えを押しつけられてはたまったものではない。社会全体で、結婚観についての規制緩和がもっと進めば、未婚男女が、少しは結婚に踏み切りやすくなるかもしれない。

しかも、女性たちが、結婚後も出産後も仕事を続けたいと思っていても、現在の職場で、結婚後も出産後もフルタイムで働いている同僚がきわめて少なければ、安心して、結婚に踏み切れないのも当然と言える。ちなみに、結婚後も、子育てしながらフルタイムで働いている女性の割合は、「第12回出生動向基本調査—夫婦調査 2002」をみると、表1のように、結婚年数が0~14年までで、子どもがいて、正規雇用で働いている女性は15%に満たないのである。しかも、結婚後も仕事を続けながら、子どもを産み育てたいと思って、松本・瀬川氏が指摘するように、「自分が受けたような、専業主婦的な育児しかイメージできないと、仕事との両立は不可能で尻込みすることになる」(松本・瀬川, 1998)だろうし、3歳児神話への執着や子どもを保育所へ預けることに抵抗があると、なおさらだ。

とはいえ、女性たちの多くが、結婚、出産後も継続して働きたがっているのかということ、どうもそうとも言えない。1998年に出された『厚生白書』によると、女性の結婚の条件が、かつての3高から、3C (comfortable, communicate, cooperative) に代わってきたと指摘されており、結婚後に期待するライフスタイルは、「男は仕事と家事、女は家事と趣味(的仕事)」の新・専業主婦志向なのだそうである。このような新・専業主婦志向の女性のなかで、理想の相手と結婚し、希望ど

表 1 結婚持続期間別にみた、妻の就業状態および子どもの有無の構成

結婚持続期間	標本数 (2002 年)	妻の就業状態					
		就業				専業主婦	
		正規雇用（再掲）					
		子なし	子あり	子なし	子あり	子なし	子あり
0～4 年	1,281(100%)	26.6%	18.1%	17.5%	10.7%	13.0%	41.3%
5～9 年	1,160(100%)	6.8%	34.1%	2.9%	13.9%	3.8%	54.3%
10～14 年	1,124(100%)	3.6%	55.5%	1.5%	15.5%	1.6%	38.2%

出典：国立社会保障・人口問題研究所 2003「第 12 回出生動向基本調査—結婚と出産に関する全国調査 夫婦調査の結果概要」13 頁をもとに作表。

おりの生活を送ることができるのは、果たしてどの程度だろうか？ 実現可能性が低いとなると、そのこともまた、女性たちにおける結婚を躊躇させる要因の一つになっていると言えるだろう。

(2) 「女性にみる結婚の意味」をめぐる言説

近年、上記のような結婚をめぐる官庁統計などから明らかにされてきた知見は、結婚への積極的な動機づけの弱まりと独身生活のメリットについてである。男女ともに、人生における結婚のウェイトが低下したことは確かである。

にもかかわらず、わが国の場合、女性に限らないかもしれないが、結婚に関わる意識調査などでは、未婚者に対して、「なぜ結婚するの？」と問うよりもむしろ、「なぜ結婚しないのか？」という問いから出発することが少なくない（ジョーンズ&ウォーレス, 1996; ニッセイ基礎研 1998; 松本・瀬川, 1997）。(ほっといて。私の勝手でしょ！) という、うんざり気味の声が聞こえてきそうである。

女性たちの結婚のイメージについて、もう少し詳細に検討していくと、結婚へと踏み切れなくさせている要因のいくつかが見えてくる。

姫野カオルコ氏は、マスメディアが女性の結婚願望を煽っている現状について、「(女性たちが) どう結婚したいのかが見当たらない。結婚という語が『どのような行為』『どのような生活』を指しているかもなく、もちろん『どんな人とどんなふ

うに』という部分もまったくない、ただ漠然と、(女性は)『結婚したい』と思っている」というのが、マスメディアの論調であると批判する(姫野, 2000)。そして、「結婚というのは、誰かと恒常的にセックスをする生活である」にもかかわらず、「20 歳を過ぎると、親や親戚が、それを急に勧めろわけだ。おかしいものだ」、と喝破する(姫野, 2000)。全く同感である。

女性たちの結婚の条件について、松本・瀬川氏によると、高学歴女性ほど、「仕事ができる人」で「家事ができる人」といった、旧来の価値観と新しい価値観とを共有しているという(松本・瀬川, 1998)。しかし、単に期待水準が高いだけではなく、条件の狭さもハードルを高くする要因になっているのである。また、女性たちが、しばしば、理想の異性の条件としてあげる「話が合う人」、「居心地のいい人」というのは、理想が高すぎるとはいえないものの、実のところ、個々の女性にとって、どんな異性なら「話が合う」のか、どんな異性なら「居心地がいい」と思えるのか、その点ははっきりしておらず、出会ってみたいとわからないというのがホンネなのである。いうなれば、自分にとって「話が合う人」、自分にとって「居心地のいい人」を探しながら、「自分探し」をしているのである。「自分らしさ」が見つからないうちは、自分に合う相手をみつけにくいのも当然と言えは当然だ。

ところで、未婚女性が、結婚に強く「必要性」

を感じる一つのきっかけとして、近年、“できちゃった結婚”が増加傾向にあること、また、「結婚している女性では、結婚というものと母親役割を担うことを結びつけて意識している」(第12回出生動向調査、2003: 19)といった知見を踏まえると、「子どもを産みたい時」という要因をあげることができる。そうであれば、「子どもを産みたい時」を結婚の契機と考えている女性にとっては、出産可能年齢の間は、「まだ結婚を急ぐことはない」のであり、「子どもを産みたいと思えない」と、結婚への動機づけは高くならないとも言える。

また、吉岡しげ美氏が、女子大生に対する意識調査から見いだした、「(彼女たちは、)結婚はしたいが、結婚によって自由が奪われるのは嫌」(吉岡、2003)という経験的一般化命題についても、データの代表性は保証されないが、しごく当然と思われる。

(3) 未婚女性にみる結婚イメージの新旧

現代の未婚女性の結婚観について、学生に対するアンケートやインターネットから検索した結婚に関する“カキコ”などから得られた情報を検討してみると、多くの女性たちの結婚イメージのなかには、前近代的な家制度下の結婚イメージ、近代家族制度下の結婚イメージ、ポスト近代家族へと踏み出した結婚イメージが混在している状況を読み取ることができる。

まず指摘できることは、セックスと結婚は別であるという意識の一般化であり、近代型の結婚の特徴であった、恋愛・結婚・セックスの三位一体は、ほぼ解体したと解されることである。また、未婚者においては、複数の異性と関係をもつことについても抵抗感がなくなり、結婚へと踏み切れない一因として、「相手を1人だけに特定できないから結婚できない」という意見が、決して特異ではないことである。しかし、そのことは、未婚のセックス・フリー化ではあっても、同時に、結婚後の一夫一婦制を当然のように受容しているこ

とを示している。ある女性は、「彼の自由恋愛を封じ込めるために結婚したい」という。いうなれば、ポスト近代型の恋愛と近代型の結婚の共存である。

ところで、未婚女性の多くは、いずれ結婚したいとは思っているが、なぜか、結婚とは、“籍を入れること”という通念がまかりとおっている。婚姻とはいわず、“入籍”なのである。戦後に民法改正がなされてすでに50年以上経っているにもかかわらず、なぜ、前近代的な“入籍”か？と、あきれるばかりであるが、芸能情報の影響が少なからずあるだろう。“籍”にこだわるつもりはないが、しいていえば、“創籍”のほうが、まだましだ。

また、結婚生活のイメージが、実に旧態依然としていることにも驚かされる。私は毎年、家族社会学の授業のなかで、学生たちと、恋愛と結婚の違いについて話し合うのだけれど、自由で楽しい恋愛のイメージに対して、結婚については、「我慢」、「束縛」、「家と家との関係の煩わしさ」、「嫁姑関係がある」、「家事が嫌」といったマイナスイメージの意見が圧倒的に多いのである。そして、学生たちには、このようなマイナスイメージの結婚への忌避感はあるにしても、新しいカップル関係を作り出すといった変革意識は乏しい。それでも、受講終了時には、結婚観の揺らいでいる学生が増えるのは、ささやかな喜びである。

さらに、未婚女性の多くは、まだまだ、“嫡出子”へのとらわれが強いことを指摘できる。セックスは自由、しかし、もし妊娠したら、出産する前に婚姻届を出したいという思いが、“できちゃった結婚”の増加につながっているが、このことは、「婚内子」、「父親のいる子」へのこだわりの反映でもある。「子どもを産むなら婚姻届を出してから」という未婚者の意識は、「子どもが欲しいから結婚したい」という意識と合致するだけではなく、「結婚しないなら、子どもを産むべきでない」、「結婚したら子どもを産んで“当たり前”」という世間の風潮を内面化した結果なのかもしれないが、これらの意識が、意図するしないにかかわ

らず、「結婚しているのに出産しないのは“おかしい”」という強迫観念の温存に寄与し、「婚外子」差別を容認する結果にもなっていることを指摘しておきたい。

(4) 現代女性の結婚志向を左右する原因説明図式

以上の考察をもとに、現在の未婚女性たちにおける、なぜ結婚するのかしないのか？ という、なぜにあてはまる要因について、図1のような「原因説明図式」を描くことができる。

- ① マスメディアからの結婚情報は氾濫しているものの、当事者にとって、人生の「羅針盤」となるような、結婚情報は乏しい。
- ② 未婚女性たちからみて、人生の先輩たちは、果たして、幸せな結婚生活を送っているようにみえるのだろうか？ 未婚女性からみて、最も身近な女性である母親たちが、必ずしも人生のモデルとは思えないだけでなく、人生のモデルとなるような女性が身近に少ない。
- ③ 未婚女性たちの多くは、いずれは結婚したいと

思っているが、同時に、未婚でいることに困っていない。性関係にもこだわりはない。それだけに、未婚でいることのメリットが大きく、未婚でいることを居づらくする要因が少ない。〈引き留め要因〉の強さである。パラサイト可能性も未婚への〈引き留め要因〉になっている。

- ④ 友だちが次々と結婚したり、親が結婚を急がせるなど、未婚でいることが居心地悪く思える事態は、結婚への〈押しの要因〉となる。親による拘束が強いといった条件も〈押しの要因〉となるだろう。
- ⑤ 「一緒に暮らしたい」「いつも一緒にいたい」という理由が結婚への〈引きの要因〉になる。「一緒に暮らしたい」「いつも一緒にいたい」という理由から、同棲を選ぶ人もいる。ただし、同棲経験率は5%程度と低い。未婚男女の多くは、同棲に否定的な親や親戚と揉めるよりは、結婚するほうが楽だという。
- ⑥ 結婚したいと思う気持ちがあっても、結婚すると、さまざまな束縛や我慢することがありそう

図1 現代の未婚女性における結婚する理由に関する原因説明図式

で踏み切れない。名前を捨てたくない、仕事も辞めたくないと思うと、踏み切れない。家と家の関係が煩わしいと踏み切れない。彼の気持ちが煮え切らないと踏み切れない。これらは、未婚への〈押し戻し要因〉とみなすことができる。

- ⑦妊娠は、結婚を決断する契機となる。結婚への〈引き金要因〉である。しかし、妊娠がすべて結婚につながるわけではなく、結婚への〈引きの要因〉が乏しかったり、結婚への〈通路づけ要因〉が不十分であったりすると、中絶という手段が選ばれることにもなる。彼の自由恋愛を封じ込めたいという思いの顕在化も〈引き金要因〉とみなせるだろう。
- ⑧親の後押し、夫の経済力、自分らしい生活の見通しがたつことなどが、結婚への〈通路づけ要因〉となる。
- ⑨男性の場合、結婚とは、トンネルか鉄橋を通過するようなもので、結婚前と結婚後と、同じ列車で連続した線路を走ることに変わらない。しかし、女性の場合、結婚とは、関所を通過するようなもので、結婚前には、関所の向こう側の結婚後の生活は、なかなかみえないし、わからない。しかも、多くの女性は、関所を通過すると、列車の乗り換えを期待される。従来、女性たちは、結婚後は、夫の列車に乗り換えて、運転手である夫に行く先を委ねることが期待されたのである。この乗り換えが嫌なら、結婚を思い留まるというのが一つの選択肢である。
- ⑩しかし、今、“ポスト近代結婚”という多様な選択肢が浮かび上がってきた。女性にとっても、結婚がトンネルや鉄橋になって、結婚前のこちら側から結婚後の向こう側が見渡せて、乗り換えなしで、夫の列車と並行して走ったり、連結して走りながら、いつでも引き返しやりセットができればいいのかもしれない。

(5) 未婚女性の多様な結婚意識と実態を問う

現代の未婚女性といっても、十把一束に語ることはできない。少なくとも、階層の違いによって、

結婚をとりまく状況が異なることが予想される。そこで、学歴と現職との違いにより、きわめておおよっぱではあるが、未婚女性の階層差からみた結婚事情を典型的に描いてみることにした。

①大卒・キャリア女性の結婚事情——現在のわが国では、男性と同等の働き方をしているのは、到底、仕事と家庭とを両立できそうにない。しかも、職場によっては、子育てしながら、フルタイムで働いているモデルとなる女性は少ない。結婚後も仕事を継続している人びとの職種は、公務員、教員、専門職などに限られている。そのため、結婚と仕事と両立できそうになれば、結婚を先延ばしするか、結婚しても出産を先送りすることになるだろう。コミュニター婚という選択もある。それとも、“将来有望な夫”に賭けて退職する？

②大卒または短大卒で一般職女性の結婚事情——彼女たちの仕事は、働きがいのある仕事とは必ずしもなりえず、年数が経つほど、同期の男性との差が顕著になる。しかし、「生活水準を低下させ、自分の自由を放棄してまで」結婚したくない。なによりも、3C条件を満たす男性との結婚希望が強い。その場合、どこで妥協するかだろう。とはいえ、「結婚しないかもしれない」という選択のために、キャリア・アップをめざし、貯蓄もする。

③大卒または短大卒で派遣社員の結婚事情——彼女たちの仕事は、不安定で使い捨てされやすいため、長く働き続けることは期待できない。結婚退職を前提で働いている人が少なくない。3C条件を満たす男性との結婚を希望しながらも、子どもが産まれたら、育児に専念したいとも思っている。他方で、必ずしも結婚に期待せず、派遣で働きながら、キャリア・アップをはかっている人たちもいるが、実現は容易ではない。

④高卒でサービス職、フリーターの結婚事情——彼女たちは、現在の仕事を長く続けたいとは考えておらず、多くがお金を稼ぐために働いてい

る。恋愛願望と結婚願望は高い。この層で、妊娠中絶や、“できちゃった結婚”が増加している。十代で“できちゃった結婚”をすると、夫婦いずれかの親元に、夫婦で依存する“パラサイト・カップル”になる可能性が結構高い。将来の自立が重要な課題である。

4. 「女性にみる結婚の意味を問う」、これから？

本稿の最後に、「結婚の意味」を問うなかで、浮かび上がってきたさらなる課題を列挙して、結びに代えたい。

- ①ライフスタイルの多様化が主張されながら、なぜ、日本社会で、多様な生き方・多様な“結婚”が差別されることなく認められないのだろうか？ という、「なぜ」の解明である。
- ②女性の階層格差と結婚事情から不平等社会日本の実態に迫ることができそうだ。
- ③現行婚姻制度が、結婚差別を生み出すメカニズムを解明することである。
- ④さまざまな女性たちの現地点から、脱近代型ライフスタイルの選択を可能にする“羅針盤”を提案することである。
- ⑤とはいえ、家族社会学の立場から、現代人の「結婚の意味」を検討するための調査・研究がきわめて乏しい現状を開拓することが、なによりの緊急課題である。

【参考文献・参考資料】

- 朝日新聞世論調査, 2003.6.27 付 (6月8, 9日実施 有権者対象 面接法 無作為二段抽出法 回収数 1949人 回収率 65%).
- 江原由美子, 1994, 「結婚しないかもしれない症候群」『家族社会学研究』6: 37-44.
- 姫野カオルコ, 2000, 『みんな、どうして結婚してゆくのだろう』集英社.
- 伊田広行, 2003, 「シングル単位視点からみえる「結婚」と「恋愛」」『家族社会学研究』14-2: 13-22

- 岩上真珠, 2003, 『ライフコースとジェンダーで読む家族』有斐閣.
- ジョーンズ, G., ウォーレス, C., 宮本みち子監訳, 1996, 『若者はなぜ大人になれないのか』新評論.
- 加藤春恵子, 2001, 「脱家父長制的結婚モデルを求めて—現代日本社会の情報砂漠を超えるために—」東京女子大学女性学研究所, 小檜山ルイ, 北條文緒著『結婚の比較文化』勁草書房, 241-272.
- 風間 孝, 2003, 「同性婚のポリティクス」『家族社会学研究』14-2, 32-42.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 1998, 『第11回出生動向基本調査—結婚と出産に関する全国調査』(1997年調査 18から50歳の独身者 12553票 9407票 回収・回収率 74.9%).
- 国立社会保障・人口問題研究所, 1999, 『第2回全国家庭動向調査結果の概要』(1998年 13630票 有効回収数 11951票 回収率 87.7% 有配偶女子 7578票について分析).
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2003, 『第12回出生動向基本調査—結婚と出産に関する全国調査—夫婦調査の結果概要』(2002年実施, 50歳未満の有配偶女子 9021人, 有効票 7916人 回収率 87.8%).
- 松本真澄, 瀬川祥子, 1998, 「晩婚化・非婚化—30代女性にはなぜ結婚しないのか」『岐阜を考える』岐阜県産業経済研究センター.
- 望月 嵩, 2003, 「結婚をどうとらえるか」『家族社会学研究』14-2: 23-31.
- 内閣府国民生活局編, 2002, 『平成13年度国民生活選好度調査—家族と生活に関する国民意識—』(2001年実施 15歳以上80歳未満男女 5000人 層化二段無作為抽出法 個別訪問留め置き法 有効回収数 3988人 回収率 79.8%).
- 内閣府国民生活局編, 2002, 『平成13年度国民生活白書—家族の暮らしと構造改革—』ぎょうせい.
- 山田昌弘, 1996, 『結婚の社会学』丸善.
- 山田昌弘, 2000, 「結婚の現在の意味」善積京子編『結婚とパートナー関係』ミネルヴァ書房, 56-80.
- 吉岡しげ美, 2003, 『花嫁人形@幸せのゆくえ—日暮れ ちゃいない私たちへ—』新読書社.
- 善積京子, 2003, 「〈近代結婚〉の揺らぎ—スウェーデン社会からみた結婚の意義—」『家族社会学研究』14-2: 43-53.